

今年度の「障害児・障害者の教育と福祉」分科会の全体会では、「コロナ禍の中での子ども・障害児者の現状と、いま教育と福祉で大切にしたいこと」をテーマにシンポジウムを行いました。そこでは、小学校の特別支援学級教員、特別支援学校教員、社会福祉法人施設長、保育園園長の4人のパネラーから報告いただき、参加者を含めての全体討論を行いました。

1人目の小学校の特別支援学級教員からは、感染症の広がりによる休校措置によって学校現場は「教員は上からの指示待ち」「子どもにはタブレットが一気に配布されたが、使用にあたっては様々な混乱や問題が起きている」などの問題が浮上、そして「通常学級の視点でいろいろなことが進んでいくことによる矛盾」が報告されました。また、障害のある子どもの家庭での居場所やネット依存が長引き1年たっても不登校となっている現状もあり、障害のある子どもへの影響の大きさが明らかとなりました。

2人目の特別支援学校教員からは、特別支援学校の現状が報告されました。学校運営がトップダウンですすめられていくこと、人との関りの制限、マスクで顔がわからない、見通しが持てない子ども等、感染予防対策によるマスク着用、活動制限などが子どもたちに深刻な影響を与えていると報告されました。高等部では進路が決まらない生徒も増えたとのことでした。感染拡大が長引く中、新たな生活様式があたりまえになっていくことへの危惧やご自身の保育・介護の問題も語られ、国民全体の課題であることを痛感させられました。

3人目は社会福祉法人施設長からの報告でした。コロナ禍で学校が休校となったことで、厳しい職員体制や環境の中、学校に行けなくなった子どもを様々な工夫を行いながら受け入れを行ってきたこと、そこから障害種別による影響の違いや事業所への影響などリアルに報告いただきました。特に感染リスクの高い重症児への影響や職員のストレスは大きかったようです。その中で、家族との情報共有が大切だと語られました。コロナ禍はまさに今の福祉・教育の脆弱性を浮き彫りにしたと言えるでしょう。

4人目は保育園の園長からの報告でした。前半の保育園の紹介では、発達の根っこ部分を太らせる実践、五感をつかって脳を育てるといった保育方針をもとに、大自然と触れ合いながら、リズム運動や子ども同士のぶつかり合い、関わり合いを大切にしている保育実践が語られました。一方で、コロナ禍においては、一緒に食事をしながら「おいしいね」と言えない、担任であってもマスクをとると泣いてしまう子ども等、乳幼児期の影響の大きさ、共感力の低下、保護者・地域とのつながりの減少、弱さを抱えている家庭へ影響などが指摘されました。

4人のパネラーからの報告をうけ、全体で意見交換を行いました。コロナ禍によって、これまでの教育実践で大事にしてきたことができなくなっていること、新しいルール・様式からはみ出す子どもの存在、小中学生全員に配布されたタブレットは個々の実態に応じたものではなく、画一的なものになっていること等、参加者からも様々な課題が提起されました。一方で、分散登校から見えてきた「少人数のよさ」が現場で広がっていることや、新たな工夫も模索されていることなど、ピンチをチャンスに変えていく気持ちもシンポジウムを通じて感じられたのではないのでしょうか。「できない」ではなく「こうすればできる」といった見方が、これまでの障害児教育・障害者運動の前進を作り出してきたことを改めて参加者と確認できたシンポジウムだったと思います。

分散会 1 では三本のレポートが発表された。レポートは以下の通り(発表順)。

- ① 「衛生管理者 1 年目の諸々・・・」北見支援学校 江口 凡太郎
- ② 「平和のアサガオを咲かせて・・・」北見支援学校 江口 凡太郎
- ③ 「ボクの気持ちを伝えたい～マサオさんとの 3 年間を通して考えたこと～」札幌伏見支援学校 藤田 明宏

参加者は共同研究者、司会者、発表者計 6 人だけだが、活発で深まった論議になった。①のレポートでは山積する学校課題を「分校から大規模校転換に伴う学校運営システムの問題」「職員相互の配慮不足からくる休職者増の問題」「体罰事案で明るみになった職員間のコミュニケーション不足の問題」「超過勤務時間の問題」としてまとめ、改善の取り組みとして「衛生委員会設置」「研修の実施」「通信の発行」「アンケートの実施」を報告する。ユニークなのは、管理職の了解のもと全教職場実態アンケートを取り、62 人から回答を得ていることだ。その結果一覧も資料として添付されている。強く感じたのは、現場で余裕が失われ、職員間の関係性やコミュニケーションが減り、多くの課題が生じていることだ。職場の分断状況が危機的段階になっていると痛感する。②は日中戦争引揚者が持ち帰り、平和の願いとともに引き継がれてきたアサガオの種を留辺蘂中学校生徒会からもらい、訪問学級で育てるという経過報告。今後、「ダーツの旅」で交流先を探すアイデアが面白い。周囲を巻き込んだ取り組みとして事後報告を期待したい。③は強度行動障害があるマサオさんとの 3 年間の取り組みを紹介している。他傷する理由を丁寧に探り、マサオさんにとって安心できる人間関係と環境整備、そしてやってみたいと思う活動に取り組む中で、確実に成長している様子が報告されている。見学旅行やショートステイ、卒業式の様子からは自制心や自己をコントロールする力が確実に獲得されたことが伺える。保護者との関係や校内からの批判も記述され、現場で取り組む大変さも伝わる内容だ。3 年間の丁寧な取り組みに敬意を表したい。

## 2021 合同教育研究全道集会第 20 分科会 第 2 分散会記録

第 2 分散会は 3 本のレポートを基に討議を行いました。

1 本目のレポートは、小学校の特別支援級の副担任であり、かつ特別支援コーディネーターとしての実践を記録したもので、児童だけでなく周囲の教職員へのサポートも行っている様子がまとめられていました。教材としてホワイトボードでなく小さいスケッチブックを使用している意図として「閉じて隠せる良さがある」ことを大切にしている、という点に代表されるように、児童の気持ちを考えて教材の工夫を行っている実践のほか、周囲の教職員への働きかけとして児童と接するとき大切にしてほしいことを「コーディネーターのつぶやき」として通信にして発行したり、経験年数の浅い同僚に対して具体的な支援方法を見てもらいながら導いていくなど、よりよい教育を行う環境づくりに奮闘している様子が見え、参加者に元気を与えました。

2 本目の特別支援学校で選挙にかかわる学習に取り組んだレポートでは、知的代替の教育課程を行っている中学生の生徒が先輩の高校 3 年生の初投票を通じて選挙に関心をもち始めたことから、担当教師が生徒に芽生え始めた社会への想いを育てようと授業を組み立てていく様子が描かれていました。共同研究者から過去の経験を交えながら知的障害者が主権者として社会に参画することの難しさや、教職員自身が選挙に向き合えていない状況があることなどが話題として出され、レポートの内容をより深めることができました。

3 本目のレポートは福祉事業所で取り組まれた、「あえてあいさつ、報・連・相をなくす」という実践の記録で、この取り組みは参加者に新鮮な驚きを与えました。コミュニケーションをとろうとすることが大きな負担となる児童生徒、利用者に対してどのように人とのかかわりを支援していくのか、という課題はどの現場でも共通しており、この事業所で取り組まれている実践の中の「あいさつをしなければならぬ」という考え方を否定することで、逆に本当に必要なコミュニケーションが残る、という部分に話が及ぶと、「学ぶこと、働くことに本当に必要なのは何なのか？」という本質的な問いかけへと討議が深まっていきました。

3 本のレポートはそれぞれ異なる現場からのものでしたが、どれも障害児・者が学びやすく、働きやすい場所づくりについて努力している現場の様子が伝わってくるものであり、参加者のこれからの実践に重要な示唆を与えてくれるものでした。

(武藤)

### 合同教研 20分科会 分散会3

分散会3では2本のレポートをもとに各校でのICT活用やその課題について討論を行いました。

全釧路教職員組合 田中先生のレポート『「学校の新生活様式」と特別支援教育』では、臨時休校になった時にも学習機会を止めないことを理由に家庭にタブレットを持ち帰り、配信を行ったことなどが話されました。家庭により通信環境の状況が見え、各家庭の格差などが課題としてあげられました。

新篠津高等養護学校 三田村先生の「一人一台端末～新篠津の場合～」では、情報の授業の取り組みや学校整備の状況などが話されました。

各校の情報交流ではICTの整備の負担感やGIGAスクール構想が内容などを含め、どのように活用するのか吟味されることなく、とりあえず使用してくださいと押し付けられること、学生の方からは、大学で教わっていないことを、実際の現場で教えることの不安などたくさんの意見が上がりました。

どうしても課題にばかり目が向きがちでしたが、ICT活用の良さも交流し、修学旅行の事前学習で、今までは見ることのできなかつた美術館の作品をアーカイブから見て、行ってみたいと楽しみをもたせたり、実際の作品の大きさなど違いを楽しむことができたことや肢体不自由のお子さんのコミュニケーションツールとしての活用などが話されました。

今まで行ってきた五感を使った活動の大切さを改めて共有したり、ICTを道具として自分用にカスタマイズさせることができるようにしていくことなど、今後の展望が語られました。

まとめとして、共同研究者の方から、福祉の現場では大人とのコミュニケーションはできるが、子ども同士でのコミュニケーションが図れない方が多いということが言われました。学校の中で、諍いになりそうな時に先回りして大人が介入してしまうことがあるのではないかと述べられ、卒業後いかに豊かな生活を送れるよう、子ども達の学びを深めることが大切ではないかと述べられました。

大学ではZOOMではなく、やはり会って会話をしたいという学生がいる一方、ZOOMだから意見が言いやすいという学生がいると話されました。また、ICTを活用することが良い一悪いという二元化された図式ではなく、どう活用していくのか、例えば書字障害の子の代替手段としての活用は良いが、書かないことでのデメリットは何かなど、社会とどう組み合わせていくのか立ち止まって考えていく必要があると述べられました。

学生や教員、福祉の現場から意見を交換することで、学校の中だけでは気づかなかつた視点に気づくことができ、改めて合同教研の意義を感じた1日となりました。